特集「『伝承文化と生涯学習』の日中韓比較研究から」について

―京都会議・国際ラウンドテーブル報告との関わり―

渡邊　洋子

On the Feature Articles: Traditional Cultures and Lifelong Learning: in relation to the Kyoto Academic Meeting and International Roundtable Session

WATANABE Yoko

本特集は、筆者が研究代表者として2006年以来、共同で取り組んできた「伝承・伝統文化と生涯学習」をめぐる日中韓比較研究の成果の一端である。本文に先立ち、この特集の契機となった2010年9月の京都会議と国際ラウンドテーブルの報告と各論文の位置づけに関わって、若干の補足説明を行いたい。

本研究は、主に日本・中国・韓国という東アジア諸社会における「伝承」「習い事」文化に着目し、その継承のあり方（伝達・伝授、学習・習得の様式）に通底する基本原理と諸要素を抽出し、同時に、グローバリゼーションの下での人々の生活と生涯学習の諸課題が、その文化の存続・変容をめぐるダイナミズムにいかに結びついているかを比較考察しようとの趣旨から、出発したものである。６年間の研究計画の下、具体的には、前半3年間（2006-2008年）は研究テーマ「『伝承・習い事』文化における学習様式と生涯学習の現代的課題に関する比較研究」の下、国内３府県の比較研究を行い、後半の3年間（2009-2011）は、「『伝承・習い事』文化における継承と生涯学習の現代的課題に関する日中韓比較研究」との発展的テーマで、日中韓の比較研究に取り組んでいる。

その中で、2010年9月18－20日、日本社会教育学会研究大会が神戸大学で開催されることを契機に、同大会のラウンドテーブル（学会事務局とは独立して会員有志が企画・運営を行って学会員に公開する）の時間に、本研究に協力を得てきた日中韓の研究者・実践者が集まる機会を設けることにした。また20日の本番に先立ち、顔合わせと互いの知見や経験および問題意識の共有化、ラウンドテーブルの打ち合わせを目的に、別の会合をもつことにした。

9月18日の京都会議は、午前9時から午後5時までの長時間にわたり、科研研究メンバーと招聘者の自己紹介と報告内容の紹介を中心に行われた。通訳補助や会場設営、記録などで協力した日本人・中国人の院生や学生たちも興味深く聞き入った。主催側からの趣旨説明の後、張妙弟先生から、中国の伝統文化の継承に関する「状況と見解」について、わかりやすい事例と豊富な写真を使ってお話いただいた。その後、招聘メンバーのみならず、参加者全員が次々と話題を提供し、質疑をもとに意見交換を行った。お互いの話題を共有し、問題意識の明確化をはかる中から、今後の共同研究で不可欠な論点を見い出すことができた。当日の様子は、韓国のインターネットニュース「オーマイニュース」（http://www.ohmynews.com/2010年9月21日付）にも掲載された。

9月20日の研究大会では、ラウンドテーブル２『伝統・伝承文化と生涯学習の課題』をめぐる日中韓の対話セッション」として実施された。当日の様子は、同学会の「学会通信」(197号)からの転載をもって代えたい。なお、これらの会議の議論と成果や課題については後日、報告書を刊行する予定である。

本部会は、日中韓における伝統・伝承文化とその継承のあり方に注目し、各々の社会でグローバリゼーションの下での人々の生活と生涯学習の諸課題に、文化の存続・変容をめぐるダイナミズムがいかに結びついているかを課題とする共同研究の一環であり、司会の相庭和彦会員（新潟大学）の言葉通り、これに先立つ京都会議と合わせ「英語を用いない希有な国際会議」として開催された。

まず大城和喜氏（元沖縄県南風原文化センター館長）から、南風原地域の二集落（喜屋武と津名山）で継承されてきた綱引きと人間形成の違いを比較対照する、実体験による迫力ある報告があった。次に胡学亮氏（中国・北京師範大学珠海校日本教育研究所長）は、安徽省の中学校での伝統文化学習の事例とともに、伝統文化を学校教育に取り入れる意義と偏狭なナショナリズムに陥る危険性を踏まえる必要性が強調された。

また趙誠姫氏（韓国・忠南教育研究所事務局長）・李鐵哲氏（同副所長）は、農村共同体運動の中で設立された同研究所での伝統的な農耕文化の重視と、民俗・年中行事を地域の子どもや教師が高齢者と共同体験する多彩な事業の取り組みが紹介され、韓国の伝統的教育制度との関わりで位置づけが明確にされた。

コメンテーターの張妙弟氏（中国・北京聯合大学北京学研究所長）は、各報告の見事な総括の後、東アジアにおける伝承・伝統文化の継承の現代的意義と日中韓比較研究の重要性を強調しつつ、今後の課題や可能性を指摘され、盛会のうちに終了した。

上記以外の会議参加者は、日中の通訳をご担当された徐静波先生（神戸大学・復旦大学)、韓国語教育に携わる朴炫国先生（龍谷大学)、日本からは、研究会のメンバーである芳澤拓也氏（沖縄県立芸術大学)、准メンバーの宮前耕史氏（北海道教育大学釧路校)、日韓の通訳を担当された呉屋淳子さん（名古屋大学大学院）などであった。今回は、参加者の多くが初対面同士であったが、インフォーマルな関わりをも含めて、大変有意義で刺激的な交流となった。

本特集は、以上の取り組みを踏まえたものである。張妙弟先生と趙誠姫先生の原稿は各々、上記の会合のために書かれた原稿を、許可を得て、本講座院生宋佳さんと神谷智昭さん（琉球大学）の手で翻訳・掲載されたものである。また、その後、ほぼ毎月開催している京都大学「伝承文化と生涯学習」研究会の2010年11月の例会では、徐静波先生にご専門の飲食文化について、2011年１月の例会では朴炫国先生に韓国農村の山神祭についてご報告いただくことができた。三番目の論文は、徐先生がご報告を日本語でまとめ直されたものである。これらの成果から受けた示唆や刺激を跳躍台に、伝承・伝統文化と生涯学習をめぐる日中韓の研究交流を少しでも前に進めていけることを願っている。